

## 第十一章 土地の地代——その性質と形成（十三）

### 改良の進展が製造品の実質価格に与える影響

改良の当然の帰結は、ほとんどの製造品の実質価格が段階的に下がることである。とりわけ加工そのものの費用、すなわち製造工程の人件費は、ほぼ例外なく低下する。機械の高度化や技能の熟達、分業と工程配分の最適化によって、同じ製品に必要な労働投入が大きく減るからである。社会が豊かになり実質賃金がかなり上がるときでさえ、必要労働の削減効果の方が通常は勝り、賃金上昇を十分に相殺して、結局は価格が下がる方向に働く。

もっとも、改良の効果を積み重ねても、原材料の実質価格の避けがたい上昇がそれを上回る製造分野もある。とりわけ大工・建具や粗製家具では、土地改良に伴う用材の実質値上がりが、最良の機械や高度な熟練、緻密な分業・工程配分の利点を相殺してなお余る。

要するに、原材料の実質価格が上がらないか、上昇がごく小さいかぎり、製造品の実

質価格はかえって大きく下がる。

前世紀から今世紀にかけて、最も著しく値下がりしたのは粗金属を用いる製造分野である。象徴的なのは時計のムーブメントで、前世紀半ばに二十ポンドしたものが、今ではおよそ二十シリングで買える。刃物や鋌前、粗金属製の玩具、いわゆるバーミンガム物・シェフィールド物も同時期に大きく値下がりしたが、時計ほどではない。この安さは欧州各地の工人を驚かせ、多くが「同等品質を、二倍でも三倍でも作れない」と認めている。粗金属製造は、分業の徹底と機械改良の余地がとりわけ広い領域である。

同じ期間、衣料部門では顕著な値下がりは見られにくい。極上布は過去二十五〜三十年代、品質調整後でもやや値上がりしたとされ、その背景には原材料を全量スペイン羊毛に依存することによる大幅な原料高がある。他方、英羊毛のみで織るヨークシャー布は、今世紀に入って品質換算でかなり値下がりしたとの指摘もある。もともと、品質評価には議論が多く、これらの情報の確度には留保が要る。衣料製造の分業体制は一世紀前とほぼ同じで、機械設備にも大差はないが、小さな改良の積み重ねが価格をいくらか押し下げた可能性はある。

とはいえ、この価格低下の確かさは、現在の被服価格を十五世紀末の水準と比べたと

きにいつそう明白で、ほとんど疑いの余地がない。当時は労働の分化が今ほど行き届かず、用いられた機械も現代よりはるかに不完全であったからである。

一四八七年（ヘンリー七世治世四年）、最上等の緋色グレイン布等「最上等のグレイン布」を幅広一ヤード十六シリング超で小売した者からは、販売ヤードごとに四十シリングを没収するとの奢侈取締法が制定された。十六シリングは現在の貨幣で約二十四シリング分の銀量に当たり、当時は最上布一ヤードの妥当な水準と見なされていたが、上限規制である以上、実勢はこれをやや上回っていた公算が大きい。他方、今日の最上布の最高値は概して一ギニー（すなわち二十一シリング）ほどであり、品質が同等（むしろ現代が優良である可能性が高い）と仮定しても、名目価格は十五世紀末以来かなり低下したことになる。実質価格の下落はさらに大きい。というのも、当時の小麦は一クォーター六シリング八ペンスで、十六シリングは二クォーターと三ブッシェル超に相当するからである。現在の基準で小麦一クォーターを二十八シリングとすれば、当時の最上布一ヤードは、今日の貨幣で少なくとも三ポンド六シリング六ペンス分の購買力に匹敵し、買い手は今日その額で得られる労働や生活資源に等しい指揮権を放棄していた計算となる。

粗物の実質価格も大きく下がったが、その下落幅は上等品には及ばない。

エドワード四世治世三年（一六四三年）、奢侈取締法は「農業召使い・一般労働者・都市外の職人の召使いは、幅広布一ヤード二シリングを超える布を衣服に用いてはならない」と定めた。当時の二シリングは銀量換算で今日の約四シリングに当たる。いまヤード四シリングで売られるヨークシャー布は、当時の最下層向け布地より品質で優り、品質調整後の名目比較でも現代の方がやや割安であった可能性はある。実質面の差はなお大きい。当時の小麦の「中庸で妥当」な価格は一ブッシェル十ペンスで、二シリングは二ブッシェルとほぼ二ペックに相当し、これを現在の相場（一ブッシェルⅡ三シリング六ペンス）で評価すれば八シリング九ペンスとなる。すなわち当時の雇用人は布一ヤードのために、今日なら八シリング九ペンスで買える生計手段に等しい購買力を差し出していたわけである。しかもこの種の法は貧者の奢侈を抑える趣旨の規制であり、実勢の衣料価格は条文上の上限をさらに上回っていた可能性が高い。

同法はまた、同じ階層の人々について、一足十四ペンスを超えるホーズ（長靴下）の着用を禁じた。十四ペンスは現在の貨幣で約二十八ペンスに相当し、当時の物価では小麦一ブッシェルとほぼ二ペックの価格に当たる。これを一ブッシェルⅡ三シリング六ペ

ンスで計算すると五シリング三ペンスとなり、今日の感覚では最下層の召使いが靴下一足に支払うにはきわめて高額だが、当時の彼らは実質的にその水準の支出を余儀なくされていたのである。

エドワード四世の時代、欧州ではストッキング編みの技法は未発達でほとんど知られておらず、当時のホーズは平織り布を裁って縫い合わせた仕立物であったため高価になりがちであった。英国で最初にストッキングを身につけたのはエリザベス女王で、スペイン大使からの献上品であったと伝わる。

粗物から上物に至るまで、毛織物に用いられた古い機械は現代に比べてはるかに不完全であったが、その後、多くの小改良に加えて決定的な三つの革新があった。第一に、デイスタフと紡錘による手紡ぎから糸車へ移行し、同じ労働での産出は少なくとも二倍以上となった。第二に、梳毛糸・毛糸の巻き取りや、織機にかける前の経糸・緯糸の整経を著しく簡便かつ短時間にする巧緻な機械が導入された。第三に、縮絨は水中での踏み作業に代えて縮絨用水車（フーリング・ミル）を用いる方式となった。なお、十六世紀初頭のイングランドやアルプス以北の欧州には、この種の風車・水車はいまだ知られておらず、その導入はイタリアが先行した。

これらの事情を総合すれば、粗製品でも精製品でも、昔は今より実質価格がはるかに高かったことがわかる。すなわち、市場に出すまでに要する手間と労働が多かったため、市場ではより多くの労働や生活手段に等しい価値でしか売買され得なかったのである。

当時のイングランドにおける粗製品づくりは、工芸や製造が勃興期にある国々と同様の家内手工業で、ほとんどの家で家族が暇な折に工程を分担したが、主たる生計ではなかった。この種の余暇労働の産物は、専門職人が生計の柱として作る品より常に安く市場に出た。他方、上質品はイングランドではなく富裕で商業の発達したフランドルで、今と同じくそれを主または唯一の糧とする専門業者が生産していた。外国製である以上、国王に古い関税（トネージ・アンド・パウンデージ）など何らかの課徴金を納めていたはずだが、その税は高くはなかった。というのも、当時の欧州では、外国製品の輸入を高関税で抑えるよりもむしろ奨励し、自国では賄えない便益や贅沢品を大貴族ができるだけ安価に手に入れられるようにするのが通例であったからである。

以上を踏まえると、古代には粗製品の実質価格が上質品に比べて現在より大幅に低かった理由も、ある程度は説明がつく。